

理学療法士は、社会を支える仕事です。

東京都理学療法士協会では、障害の有無にかかわらず、だれもが安心して暮らせる街づくりを目指し、さまざまな公益活動に取り組んでいます。「障害がある」という理由だけで、できることや選べる道が少なくなってしまう——もしそんなことがあるとしたら、それは私たち一人ひとりの心の中に、目に見えないバリアが生まれているからかもしれません。こうした心のバリアをなくすためには、自分とは異なるさまざまな事情を持つ人たちと、協力し合いながら暮らしていく力・誰かの困りごとやつらさを想像し、寄り添う力・みんなが気持ちよく暮らせるよう、多様な意見をまとめ、行動につなげていく力といった「心のバリアフリー」に必要な力を、私たち一人ひとりが身につけていくことが大切だと考えています。東京都理学療法士協会は、各種の啓発活動を通じて、心のバリアフリーの理解を深め、共生社会の実現に向けた取り組みを進めています。

公益社団法人東京都理学療法士協会 会長 豊田 輝

東京都理学療法士協会の活動報告



エスカレーターの正しい乗り方や心のバリアフリーを子ども目線で伝える、マナー啓発マンガ。



小学生向けに共生社会や心のバリアフリーを学ぶ体験イベントを開催し、共能力育成と障害理解を促進。



エスカレーターで立ち止まる事情を示すポスターやキーホルダーを制作し、多様な事情の人への理解や思いやりを促進する啓発活動として、障がい者支援と心のバリアフリーの普及に貢献。



『エスカレーター止まって乗りたい人がいる』広告賞受賞、誰もが暮らしやすい社会を目指す啓発活動として高く評価。



東京都『心のバリアフリー』サポート企業に登録。多様な人への理解促進と共生社会づくりに連携しています。



障がい理解や心のバリアフリーをテーマにした小学生向け漫画教材「わけがあつてこちら側に止まっています」を制作しwebサイトでも無料公開。



INTERVIEW

小学生 × 障がい当事者 × 理学療法士

東京都理学療法士協会は、毎年夏休みに、小学生を対象に、「インクルーシブ教育体験イベント「共生社会ってなんだろう?」を無料開催しています。その参加者と一緒にイベントを振り返りました。

子どもたちが考える
やさしい社会は
どんな社会?



子どもたち
考える
共生社会

こどもと当事者の声から 見えた共生社会のヒント

夏休み、こどもたちと「エスカレーター乗り方」を題材に、共生社会を考えるワークショップとポッチャ体験を行いました。立場の違いを想像し、体験し、言葉にする学びから見えた「やさしい社会」のヒントを、この対談で振り返ります。



参加者紹介



石川愛香

公益社団法人 東京都理学療法士協会
エスカレーターマナーアップ推進委員会 委員長



野崎展史

公益社団法人 東京都理学療法士協会
エスカレーターマナーアップ推進委員会
子どもプロジェクト統括リーダー



奥澤まゆ

渋谷本町学園 5年生
*夏休みイベント2年連続参加



道解真人

鹿本学園高等部 2年生
*ポッチャ部キャプテン
*参加者である小学生にポッチャを教える講師として参加

なぜこのイベントを行ったのか？

こどもの頃から、社会を考える視点を育てたい

石川愛香

これまでエスカレーターの安全な乗り方は、大人向けの啓発が中心でした。駅でのポスター掲示や街頭での呼びかけなど、どちらかというと「ルールを伝える」活動が多かったと思います。でも本当は、もっと根っこの部分、つまり「どうしてそうするのか」を考えることが大切だと感じていました。小さい頃から、いろんな人の立場を想像する経験ができれば、街の見え方はきっと変わります。そう思って、今回はこどもを主役にしたプロジェクトとして、このイベントを企画しました。



「ポッチャ体験」を通して

知らない人とも、自然につながるスポーツ

奥澤まゆ

ほとんど知らない人たちとチームを組んでポッチャをやったのが、すごく印象に残っています。最初は少し緊張したけど、やっているうちに自然と声をかけ合うようになって、楽しかったです。イベントに参加してから、駅でエスカレーターのポスターが前より目に入るようになった気がします。

道解真人

ポッチャの一番の魅力は、年齢や障害の有無に関係なく、誰でも一緒にできる場所だと思います。個人競技としてもできますが、イベントのようにチームで協力すると、初対面の人も自然に会話が生まれます。今回も、知らない人同士が「どう投げる？」と相談しながらプレーしている姿が印象的でした。

野崎展史

アンケートでも「道解さんの説明がとても分かりやすかった」「安心して参加できた」という声が多く届いていました。



教える立場を経験して

伝えることで、自分自身も成長する

道解真人

人に教える立場になる経験は、これまであまりありませんでした。イベント前は「ちゃんと伝えられるかな」「失敗したらどうしよう」と不安もありました。でも実際にやってみると、みなさんが真剣に話を聞いてくれて、反応も返してくれたので、途中からは楽しい気持ちのほうが大きくなりました。終わったあとに「分かりやすかった」と言ってもらえたことで、ポッチャだけでなく、自分の言葉に少し自信が持てるようになりました。学校でキャプテンを任される場面でも、以前より前向きに発言できるようになったと思います。

「エスカレーター授業」を通して

奥澤まゆ

杖を使っているおじいさん、スーツケースを持っている会社員、腕をケガしている人、子どもを連れている人など、いろんな立場の登場人物について考えました。「この人はどんな気持ちかな？」と考えるのが面白かったです。発表は少し緊張したけど、大変だとは思わず、楽しかった気持ちのほうが強かったです。

石川愛香

大人はつい「こうするべき」という答えを出したくなりますが、子どもたちの意見を聞くと、大人では思いつかない視点がたくさん出てきます。急いでいる人の事情や、その場その場で変わる判断など、私自身も考えを広げてもらいました。



エスカレーターの乗り方、変わった？

奥澤まゆ

前ほど「必ず左側に立たなきゃ」と思わなくなりました。すごく混んでいるときは、くせで左に立つこともあるけど、余裕があるときは無理に片側に寄らなくなったと思います。

野崎展史

ルールを守らせることよりも、「状況を見て考える」ことが大切です。まゆさんの変化は、この活動が目指している姿そのものですね。

当事者の視点：心のバリアフリー

道解真人

僕はエスカレーターを使えないので、エレベーターを利用することが多いです。でもショッピングモールなどでは、人が多くて何度も見送ることがあります。車いすはスペースを取るの、申し訳ない気持ちになることもあります。だからこそ、周りの人のちょっとした譲り合いがあると、すごく助かります。

奥澤まゆ

必要そうな人がいたら譲るのが自然だと思いました。当たり前にできたらいいなと思います。

「助ける」と「見守る」のあいだ

道解真人

声をかけてもらえるのは嬉しいです。でも、自分でできることもあります。「手伝いましょうか？」と聞いてもらえて、「大丈夫です」とか「お願いします」と答えられる関係が理想です。皆が気持ちよくやり取りできることが、一番のバリアフリーだと感じます。

実はとても身近な「障害」

野崎展史

日本では、障害者手帳の発行数で見ると約10人に1人が障害を持っています。でも街を歩いていて、そう感じることはあまりありません。それは、見た目では分からない障害が多いからかもしれません。

これからにつながる一步

正解を決めない、考える授業

道解真人

楽しく参加しながら、共生社会について考えられるイベントはとても良いと思いました。エスカレーター以外にも、日常の中には考えるテーマがたくさんあると思うので、また違う題材でも、みんなと一緒に取り組めたら嬉しいです。



奥澤まゆ

エスカレーターに対する考え方が変わりました。今は小さな変化かもしれないけど、これが少しずつ広がって、みんなが暮らしやすい社会につながったらいいなと思います。



保護者の視点から

奥澤まゆさんのお母さま

最初は「ちゃんと参加できるかな」と少し不安もありました。でも帰ってきた娘が、「楽しかった」「また行きたい」と話してくれて、イベントでの出来事や考えたことを家でも自然に話そうになりました。エスカレーターに乗るときも、「今はどうするのがいいかな」と立ち止まって考える姿を見るようになり、親としても気づかされることが多かったです。こうした経験を、学校や家庭だけでなく、社会の中でできたことが、とても貴重だったと感じています。